



に、思う。

降りてゆく生き方

——いのちを、守りたい。



皆さんはもうご覧になりましたか？ 去る1月19日(土)、西区「ちえりあ」で上映された『降りてゆく生き方』。20年前に降りる生き方を始めてしまった(?)自分としては、いつか見ないわけにはいかないだろうと思っていたこの映画。2009年の封切以来、全国各地で自主上映され、何度もチャンス逃していましたが、ようやく見る事が出来ました。

冒頭、酒蔵のシーン。仏壇の額縁に納まって登場するのは、何とまほろばでもおなじみ、寺田本家の23代目当主だった故寺田啓佐さんではありませんか!! この映画を撮影していた当時元気だった彼は、今は本当に額縁の中の人となってしまいました。その事実が複雑な思いとなって胸に迫ります。



しかし、話が進むにつれ、その寺田さんのメッセージが随所に散りばめられ、色鮮やかにこの映画を染めていることに気づきます。

また、この映画には延べ1700名に及ぶエキストラの方が参加されたそうです。そのエキストラの方々の稚拙な(失礼)演技にもかかわらず、思わずホロっと強く心を揺さぶられてしまいました。いったいどうしてなのでしょう。



上映後、プロデューサーの竹邨(たけむら)さんが語った言葉の中にその答えがありました。

ある日、車椅子の女性がオーディションを受けにこられたそうです。「子供を一人暮らしに心臓が悪くなり、今は車椅子の生活になってしまった。いつか自分はこの世からいなくなるだろう。でも、私が生きた証を子供たちに映像として残してあげたい……。」

その言葉を聞いた監督はスタッフを説得し、シナリオを書き換えてまで、1700人の応募者すべてを出演させるように決めたのだそうです。(その女性は2年前に亡くなりました。)

彼らはこの映画を作るにあたり、延べ300冊以上もの本を読み、寺田さんをはじめ200人以上の先駆的な生き方をしている方々に会って話を聞いたと言います。その熱い思いがひしひしと画面から伝わってきます。

しかし、ふと、「もしかしたら彼らは、この映画を作られたのではないか……」との思いが心をよぎりました。森の神、酒の神、田畑の神、すべてを生み出したいのちの大もとに……。そのイノチの叫びが出演者に憑り移り、見るものの心を打つのかもかもしれません。

ところで、映画のタイトルになっている『降りてゆく生き方』とはどんな生き方なのでしょう。

私たちは物心ついた子供の頃から誰かと競争させられ、比べられ、人より上に立つことを求められてきました。地位や名誉、お金や物を多く持つことがステータスとされ、誰もが上昇志向で生きてきた時代の渦中で、いつしか大切な何かを見失ってしまったのかもしれない。いまだ多くの人が、そんな社会の中でもがき、苦しみ、歯を食いしばって生きているのではないのでしょうか。



「そんなに上を求めて自分を傷つけながら生きる必要なんてないだよ。君らしく生きること。この社会の上昇志向から降りて、本当の自分の声を聞き、自然に沿った君らしい生き方をはじめたら……。」



主人公の生き方を通して、そんな心の声が聞こえてくるようでした。

私事ですが、かつて大きな所帯に身を寄せていたものの、心の命じるままに従おうと、昇るレールを降りました。その後デザインを求める道はやがて自然の美を求める道へと歩みを変え、いのちと共にある生き方へと導いてくれました。

まほろばでの18年間で学んだことは沢山あるけれど、その多くがこの映画に詰め込まれていました。自然、食の大切さ、農といのち、人とのつながり、誰かの為に人生をかける生き方……。忘れていたものを思い出し、あらためて初心に返れと言われている気がしました。



主演の武田鉄也さんのコミカルな演技も、シリアスなテーマをほっと解きほぐし、じんわり水が大地にしみこむように、製作者の思いをやさしく伝えてくれています。

故人役で登場した寺田さん。本当に彼を失ってしまったのは悲しいけれど、“人々が自然の懐へと立ち帰る”この映画のストーリーが、もしかしたら現実になるかもしれない……。そんな希望を与えてくれたのも事実です。

プロデューサーとして昨年単身札幌に移り住み、この映画の上映にすべてを捧げている竹邨勉さんの生き方もまた、素晴らしい。たった一人で上映企画から営業、チラシの手配、当日の受付が終わると壇上で司会を務め、そのまま走ってプロジェクターのスイッチON……。汗をかき、息を切らしながらこなします。なぜ彼がそこまでのめりこむのか、その理由も分かったような気がしました。



そう、熱いものが流れているのです。いのちの熱が。

見終わったあと、心が暖くなり、誰かと話したくなるそんな映画でした。そして、今、こうして生きていること、生かされていることに、感謝したくなりました。

きっとまだどこか皆様のお近くで上映されることでしょう。ご興味のある方は、ぜひ次回見逃さずに、楽しみにこの映画を味わってみてください。

もしかしたら、求めていた何かを見つけることが出来るかもしれません。

(編集部 島田 浩)